目的意識を明確に

歯学部長　二階宏昌

歯学部卒業生ならびに歯学研究科を修了した諸君にまずは心からお祝い申し上げる。

人口十万に五十人の歯科医をというわが国医療行政の所期の目標は達成され、都市部ではその過剰が問題となる時代ではある。しかもこれまで歯科診療の対象だった疾患は予防が進み、先進国高齢化社会における歯科医療は二十一世紀中葉に向けて大きく変貌すると予測せざるをえない。このような時代の歯科界を背負うことになる諸君、歯科医となって、あるいは博士となっての第一歩を踏み出そうとする大きな節目に、胸中どのような感慨を生じ、人生計画を描こうとするのか。

将来の目標を明確にすることである。単なる歯の欠損補塡への需要は激減し、質の高い生活につながる顎口腔の健康と機能保持、それを通じて全身の健康管理に対処できる、一般医学の知識を背景とした総合歯科医（GP）、さもなくば高度の職能を有する専門医（諸分野の認定医）、臨床医としては二極化のいずれかの道を選ぶことになるだろう。あるいは教育研究に目標を定め、国際的に評価される活動に喜びを見いだせる人材こそ益々望まれる。

何も今直ちに三者択一を迫るのではない。可能性を求めて将来を見据え、模索のうちにいずれかの道を確実に歩み始めれば、必ずや活路は開ける。ただ、時の流れはあまりにも速やかなこと、そして平凡な言葉を贈るが、自ら強く求めずして得ることのないことだけは銘記すべきである。健闘と飛躍を祈る。

怠惰の奨め

工学部長　佐々木和夫

何かの本で、中世ヨーロッパの農民の平均労働時間は一日二時間とあるのに驚いた記憶がある。出典は覚えていないが当時学長であった飯島宗一氏とそのことを話題に話し合ったのを覚えている。

生産性は低く、全体に貧しかった時代だから、二十時間の誤植ではないかと一瞬怪しんだが、すぐに思いあたった。年間労働時間が二千時間を超える今の状況こそ異常なのであって、昔は遙かにノンビリしていたに違いない。私は幼時を岩手の僻村で育った。一九三〇年代のことである。農民は貧しく、稗や粟を常食に塩鮭の一片でもあれば御馳走であるような暮らしのなかで、時は悠々と流れていたものだ。近隣に葬式でもあろうものなら、男も女も家事を投げうって駆けつけ、造花を作ったり、卒塔婆を削ったり、無給の奉仕にいそしんでいた。恐らく芸北や島根でも余り変わらなかったことだろう。たった半世紀前のことである。

ルイス・マンフォードは、怠惰を除いた他の全てのキリスト教の悪徳は、今や徳目に変わったと説いているが、その通りなのである。

今の世の中では、産業が神様になったと言った人もいる。何かが狂ってはいまいか。

私はむしろ、怠惰をこそ徳目に加えるべきだと思う。怠惰が嫌いなら休息と言ってもよい。勤労をやめて、独り静かに瞑想する中に思想が生まれ、着想が湧き、芸術が花咲く。

諸君、如何。